

【p 80～p 83】 たんばやきのふるさと

1 資料活用にあたって

- 事前または事後に、遊びや生活科などの学習を通して、家庭や学校を取り巻く郷土の文化に触れる体験をさせることが望ましい。

2 資料の読み方のポイント

- 変化するのは：ぼく（子どもが ぼく になって考えられるように発問を工夫する。）
 - ※ ぼくは、はじめは郷土を意識していないが、陶器が自分の住んでいるたんばの伝統的な品物であること、毎日使っている茶わんもたんば焼きであることを知って、郷土に誇りと愛着を持つ。
- 変化するきっかけ（助言）は：「毎日 つかっとるお茶わんも たんばやきなんやで。」
- 変化するところは：「えっ、ほんま？」

3 読み物資料の素材について

【参考文献等】

- ・ 丹波篠山市小学校社会科副読本「わたしたちの篠山市」

【参考URL】

- ・ 丹波篠山市（「丹波ぶらり散歩道」）
<http://www.city.sasayama.hyogo.jp/index.html>
- ・ 丹波伝統工芸公園 立杭陶の郷
<http://www.tanbayaki.com/>
- ・ 兵庫県立兵庫陶芸美術館
<http://www.mcart.jp/>

【訪れたい場所】

- ・ 丹波伝統工芸公園 立杭陶の郷
丹波篠山市上立杭3 TEL：079-597-2034
- ・ 兵庫県立兵庫陶芸美術館
丹波篠山市上立杭4 TEL：079-597-3961

※ 両館とも陶芸教室が開講されている。また、丹波篠山市立今田小学校にも登窯がある。

○ 丹波焼について

- ・ 立杭焼とも丹波立杭焼とも呼ばれ、日本六古窯（瀬戸・常滑・越前・信楽・丹波・備前）の一つとして有名である。起こりは平安末期の須恵器から発展し、慶長末期ごろ（1610～1615年）になると、山の斜面を利用した登窯が開発された。鉢や皿、壺、茶器をはじめ生活用品を中心に高級な工芸品まで作られるようになった。
- ・ 現在、丹波篠山市今田町上立杭、下立杭、釜屋地区には丹波焼きの窯元が約60軒あり、伝統を守りながら新しい技法を加えて、たくましく美しい工芸作品を作り続けている。丹波立杭窯（作窯技法）は国指定重要無形文化財、登窯一基が県指定民族文化財、丹波焼古窯跡は県指定史跡となっている。
- ・ 毎年10月の第3土曜日・日曜日には「丹波焼・陶器まつり」が開催され、大勢の人で終日にぎわう。

4 展開の具体例

たんばやきのふるさと

- ・主 題 名 ・ふるさとの自慢 C (15)
- ・資料の概要 ・父と出かけた陶器祭りで丹波焼に興味を持ったぼくが、登り窯を見て、ますます親しみを
感じ、ふるさとの焼きものづくりへの気持ちを高めていく。そして、できあがった作
品を母に自慢している自分の姿を想像し心を躍らせ、ふるさとに伝わるもののよさを感じ
はじめる。
- ・ね ら い ・お父さんに、毎日使っている茶碗も丹波焼だと聞かされて道徳的に変化するぼくを通し
て郷土の文化に親しみ愛着を持つ道徳的心情を育てる。

・展開の具体例

	学習活動	主な発問と予想される児童の反応
導 入	・今日の資料に興味を持つ。	(丹波焼等の写真を見せながら) このような焼き物を見たことがありますか。
展 開	・資料の範読を聞きながら黙読をする。	
	・陶器祭りでお父さんから丹波焼のことを教えてもらった時の主人公の気持ちを考える。	陶器祭りでお父さんから丹波焼のことを教えてもらったぼくは、どんなことを思ったのでしょうか。 ・そんなに有名なものが、ぼくの町の近くで作られていたんだな。 ・ずっと昔から伝えられてきたってすごいな。
	・登り窯を見ている時の主人公の気持ちを考える。	登り窯を見せてもらったぼくは、どんなことを思ったのでしょうか。 ・土のかたまりがここで丹波焼になるんだな。 ・ぼくの恐竜もここで丹波焼になったんだね。 ・昔の人がこんな窯を発明したなんてすごいな。
	・丹波焼を日常使っていることを知った時の主人公の気持ちを考える。	「えっ、ほんま？」と言った時、ぼくは、どんなことを思ったのでしょうか。 ・こんなすごいものを毎日使っているなんて、何だかうれしいな。 ・丹波焼は、ぼくたちの身近なものなんだね。
終 末	・母に丹波焼の自慢をする主人公の言葉を考える。	ぼくは、お母さんに何と言って丹波焼きの自慢をしたいと思っているのでしょうか。 ・これって、登り窯っていうトンネルで焼いたんだよ。 ・丹波焼はずっと昔から伝わっているものなんだよ。 ・丹波焼は、自慢できるぼくたちの宝物なんだよ。
	・感じたことを発表する。	感じたことを発表しましょう。

日本でも有名で伝統的な焼き物が、自分たちの地域で作られていることを知った主人公の心を考えさせる。

登り窯を見て驚いている主人公の心に共感させる。

お父さんから丹波焼を家で毎日使っている話を聞いたことがきっかけとなり、主人公が丹波焼を身近で親しみのあるものに感じていることをつかませる。

「お母さんに丹波焼きのことを自慢したい」という気持ちになった主人公の郷土を愛する心情の高まりをおさえる。